

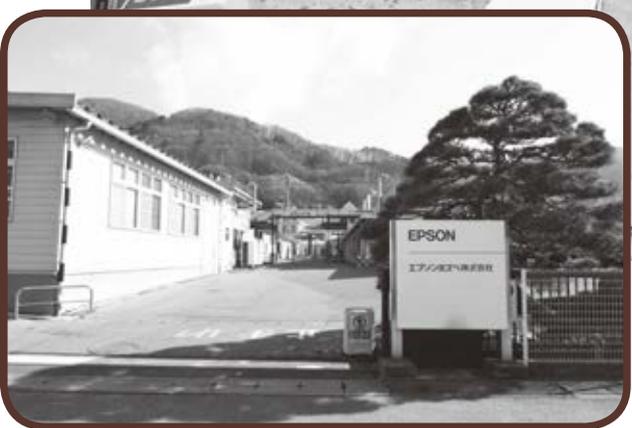
「アビリンピック挑戦」が 職場の活性化に

— エプソンミズベ株式会社 (長野県) —

職場
ルポ



(文) 豊浦美紀 (写真) 小山博孝・官野貴



取材先データ

エプソンミズベ株式会社

〒392-0027 長野県諏訪市湖岸通り1-18-12
TEL 0266-58-8833 FAX 0266-58-8834

Keyword: アビリンピック、障害者職業生活相談員、職場適応援助者 (ジョブコーチ)

POINT

- ① アビリンピックへの出場は、業務内容に関係なく本人の意欲を尊重
- ② 就業時間内に練習時間を確保。業務ができない時間は同僚がフォロー
- ③ サポートする従業員に対し、カウンセリングや勉強会を開催して支える

全国大会に5人が出場

2018（平成30）年11月に開催された「第38回全国アビリンピック沖縄大会」は、過去最多となる選手382人が参加した。なかでも、社内から5人が出場し、4人が金・銀・銅賞を獲得する大きな活躍を見せた企業がある。長野県に本社・拠点を構える「セイコーエプソン株式会社」（以下、「エプソン」）の特例子会社「エプソンミズベ株式会社」（以下、「ミズベ」）だ。2004年からアビリンピックに参加し、昨年の地方大会には過去最多15人が参加したという。彼らが日ごろ職場でどのように働きながらアビリンピックを



全国アビリンピック沖縄大会で入賞した同社のみなさん（エプソンミズベ提供写真）

目指しているのか、訪ねてみることにした。

1984（昭和59）年、全国14番目の特例子会社としてスタートしたミズベには、障害のある従業員134人（2019年2月時点）が在籍している。障害種別の内訳は知的障害者86人（64%）、身体障害者33人（25%）、精神障害者15人（11%）。もう一つの特例子会社「有有限会社エプソンスワン」（山形県）を含め、エプソングループ全体の障害者雇用率は25.5%（2018年6月1日時点）。うち4割超がミズベで占められている。

エプソンとミズベの本社は、いずれも諏訪市にある。冬の風物詩「御神渡り」で知られる諏訪湖や諏訪大社などがある観光地だが、精密機械・部品関連に代表される工業都市でもある。長野県内に点在するエプソンの事業所内8カ所に、ミズベも業務拠点を置いている。エプソンから請け負っている業務内容は、カートリッジ類の仕分けから防塵衣類クリーニング、DTP、生産用部品の再生、時計梱包、特許図面作成、ビルクリーニングなど、20種類以上にわたる。

就業時間内に練習

さっそくアビリンピックに挑戦した選手たちが働く現場を見て回った。まずはミズベ本社に併設されている湖畔工場。



ここでは使用済みインクヤトナーのカートリッジ仕分け、基板実装、時計部品の加工前の段取り作業、生産用部品再生などを行っている。

リサイクルを目的とした「インクカートリッジ里帰りプロジェクト」の一端をになう仕分け部署には、見覚えのある箱がたくさん積み上げられていた。郵便局などに置いてあるカートリッジ回収ボックスだ。ここではメーカーごとに仕分け直している。小中学校などから寄せられたベルマークつきインク・トナーカートリッジの集計なども行っていた。

両手を流れるように動かしながら仕分け作業をしていた平林昌也さん（23歳）は、昨年の全国アビリンピック沖縄大会で金賞に輝いた1人だ。出場した「製品パッキング」種目では、圧倒的なスピードと正確さで会場の見学者を驚かせていた。平林さんは地元就労移行支援事業

「製品パッキング」種目で念願の金賞を受賞した平林昌也さん（左）。インクカートリッジの仕分け作業をしている



基板実装の作業をする、リーダーの向山雅士さん



リーダーの武居晶子さん



平林さんの指導役、半澤正則さん

所に通っていたところから同種目に出場しており、入社後に「今年も挑戦してみる？」と声をかけられ「はい」と即答したという。練習場所を確保してもらい、毎日1時間以上パッキングの練習に取り組んだ。

平林さんは「全国大会から戻ると新聞などに出了たので、学校時代の先生や友人から『おめでとう』との連絡が来てうれしかったですね。金賞を取った種目には参加できなくなるので、立候補する同僚がいたらサポートしてあげたいです」と語ってくれた。いまの仕事については「環境保護活動や社会貢献の一部になっていると思うと、やりがいのある仕事だなと実感できます」と話す。

指導役の半澤正則さんに話を聞いた。「出場種目と実際の仕事内容は直接的には関係はありませんが、競技で入賞を目ざすことで日ごろの仕事のモチベーションも、ぐっと上がることがわかります。周りも彼が練習に打ち込めるよう『サポートしよう』という一体感が生まれます」

リーダーを務めている武居晶子さんは、「実際にメンバーが結果を出す様子を見て『自分も挑戦したい』と相談してくる人もいます。一方で『たいへんそうだから無理』と尻込みする人も当然いますから、無理にすすめ

ることはしません。まずは毎日、みんな楽しく働けることを大事にしています」と笑顔で話してくれた。

はんだごての職人技も

次に、湖畔工場の製品第2チームと呼ばれるフロアを訪れた。10人弱のメンバーが一人ずつ大きな作業デスクに座り、複雑な作業に黙々と取り組んでいた。ここでは主に下肢障害や聴覚障害のあるメンバーが、基板実装や時計部品の加工前の段取り作業などを行っている。電子回路基板に向き合い作業していた向山雅士さん(40歳)は、2013年全国アビリンピック大会「電子回路接続」種目で金賞に輝いた経歴を持つ。2017年度には、当機構から優秀労働障害者「理事長努力賞」の表彰を受けた。はんだごての高い技術を持つ向山さんは「ときには計30時間ぐらい集中して取り組む案件があるため苦労しますが、達成感も大きいですね。いまはリーダーとして、業務請負の見積りから出荷までのとりまとめも任されています」と笑顔で答えてくれた。

向山さんの隣で別の作業をしていた藤森千恵さん(60歳)も「電子機器組立」種目でアビリンピック全国大会に3回出場し入賞している。熟達した職人技を買われ、定年退職後も再雇用されたそうだが、聴覚障害があるが、向山さんが「独学で



向山さん(手前)と手話で話す藤森千恵さん(奥)

覚えた」という手話を介し、冗談も交えながらスムーズに会話をしていた。

手話のできる社員に囲まれ

エプソン本社内にあるミズベの諏訪工場にもアビリンピック出場者がいる。訪ねたのは高速ラインインクジェットプリンターを使った印刷部署。短時間で大量に印刷できるため、主に社内報や労働組合機関紙、生活協同組合の印刷物などを取り扱っているそうだ。

複数のプリンターを同時に操作していた市川尚正さん(39歳)は、入社18年目。全国アビリンピック沖縄大会では「DTP」種目で二度目の全国大会への出場だったが、残念ながら入賞には届かなかった。大会の感想を、リーダーの渡邊則夫さんとの手話を通して伝えてくれた。「レベルが高くて、まだまだ自分の実力



ペーパーラボの操作をする武居昌紀さん



全国アビリンピック「電子機器組立」種目に
出場し、銅賞3回のベテラン、横内庄一さん



高速ラインインクジェットプリンターでの
印刷を担当する市川尚正さん



「感性」を見込まれて、
清掃チームから異動してきた

は未熟でした。来年はもっと腕を磨いてメダルを取りたいです」

いまは印刷業務がメインで、DTP業務はたまに手伝うぐらいだという市川さんだが、今年の長野のアビリンピック地方大会PRのためのポスターデザインを任せられた。

市川さんは「この職場は周りで手話を使える人が多く、コミュニケーションで困ることはありません。仕事内容や連絡事項を細かく伝えてくれるので安心です。気兼ねなく、仕事に集中できます」とも教えてくれた。ちなみに職場には手書き用の電子ボードも置かれていて、専門用語などを説明するときなどに活用しているそうだ。

ワークフェアで 名刺作成の実演

本社内には、多くの社外見学者が訪れる場所もある。「ペーパーラボ」が置かれたフロアだ。エプソンが2015年に世界に先駆けて新開発したという製品「ペーパーラボ」は、機密文書などの使用済みの紙を、水をほとんど使わず新たな紙に再生する「乾式オフィス製紙機」だ。この部署では、社内から集まってきた使用済み文書1日あたり約6千枚を、5千枚の再生紙にしている。

ペーパーラボの操作に従事している武居昌紀さん（30歳）は2016年に入社。別工場の清掃チームにいたが、何度かペーパーラボ部を手伝う機会があり、能力を見込まれて昨年異動してきたそうだ。

「まだ新しい製品で作業内容の改善をくり返しているため、新たな作業を覚えていくのは少しいへんですが、迷ったと

きは上司に確認しています。作業の合間に世間話をするのも楽しいですね」

オペレーターとして指導役もつとめる村崎和浩さんに、武居さんの仕事ぶりについて聞くと「この作業で必要な『感性』も持ち合わせており、優秀です」と太鼓判を押してくれた。コピー用紙・名刺・ノートなど、使用目的によって再生紙の仕様は異なるため、用途に合わせて投入する紙を手際よく的確に仕分けたり、効率を考えて段取りを行うなど、さまざまな工夫をしているという。「武居さんは、職場で欠かせない存在になっています」と村崎さん。

この再生紙をフルに使い、エプソン社員の名刺もつくっている。下肢障害のある森下美和さん（43歳）は、パソコンと専用のプリンターを駆使して名刺づくりに励む。全国アビリンピック沖縄大会にも同行し、「障害者ワークフェア」の出展ブースで名刺印刷の実演を担当した。「400人分の名刺をつくらうと再生紙400枚を持ち込んでがんばったのですが、結果は200人分」と苦笑いする森下さんだが、「多くの企業の方や来場者のみなさまと交流し、再生紙のことも紹介できて、よい経験になりました」と語る。

ペーパーラボは来年度以降、ほかの事業所にも配置し、障害のある従業員がかかる業務として、さらに定着させていく予定だそうだ。

職場 レベル



清掃班の山崎芹菜さん



「ビルクリーニング」種目で銀賞を獲得した与曾井瑞穂さん

レベルの高い ビルクリーニング

ミズベの主力業務の一つとなっている「ビルクリーニング」は、1995年に外部委託から切り替える形で始まり、いまはエプソン本社を含め県内工場5カ所で行っている。全国アビリンピックの2017年栃木大会と2018年の沖縄大会に出場した、豊科工場の与曾井瑞穂さんが、「ビルクリーニング」種目で連続して銀賞を獲得するなど、レベルの高さがうかがえる。

昨年入社したばかりの山崎芹菜さん(26歳)も「いつかは挑戦してみたい」と遠慮がちに話してくれたが、リーダーの樋口隆子さんは「山崎さんは、とても優秀なので、ぜひ挑戦してほしいですね」と背中を押す。「清掃用の道具は、食堂や水回りを含め、場所に合わせていろいろあるのですが、山崎さんは一つひとつについていねいに使いこなして取り組んでくれています」日ごろは、昼休みの同僚たちとの歓談が楽しみだという山崎さんは、聴覚障害のある同僚との会話のために、独学で手話も勉強しているそうだ。

企業に籍型ジョブコーチ(職場適応援助者)でもある樋口さんは「一人ひとりの個性に合った指導をしながら、日々の小さな変化を見逃さないように心がけています。みんなに楽しく通ってもらうことが一番」としながら、今後は作業エリ

アの拡大も狙いたいと語る。「実は、社員が清掃を担当している場所は手が回りきっていないようで、私たちがやったほうがキレイになるからです」と笑いながら明かしてくれた。

取材陣が最後に訪れたのは、本社から車で45分ほど離れた松本市の神林事業所。ここには大型プリンター用インクカートリッジの分解作業部署などが入っている。分解によって7割のリサイクルを実現しているという。カートリッジに付随しているICチップを取り外し、ラベルをはがし取り、プラスチックケースを分解し、インクパックを取り出し、分別仕分けする作業を、十数人で定期的に役割を入れ替えながら行っている。

この日、ラベルはがし作業に取り組んでいた上條美咲さん(23)は、全国アビリンピック沖縄大会の「オフィスアシスタント」種目で金賞に輝いた。前回の栃木大会で初出場して入賞を逃し「悔しくて号泣した」という上條さんが、今回は表彰台で「嬉しくて号泣した」姿が印象的だった。大会前は、競技のために封筒や紙などを用意し、毎日2時間の練習時間も確保してもらったという。業務ができない時間はほかのメンバーがカバーした。入社5年目という上條さんは「今まで先輩たちに支えてもらってきたので、今後は後輩たちに、仕事を教えたり、いろいろな相談に乗ってあげたいですね」



「オフィスアシスタント」種目で金賞の上條美咲さん

と頼もしい表情で語ってくれた。指導役の洞澤陽子さんにも話を聞いた。「競技の練習も普段の業務も、本人がしっかりと納得したうえで取り組めるよう心がけています。特にここは安全にも気をつけなければいけないため、本人の作業のしやすさなどを考慮し、作業方法やペースを一緒に試行錯誤しています」

サポート側の従業員も支援

アビリンピックに挑戦する障害のある従業員が増える背景には、その意欲を引き出し、大会までの練習を含めて支えるサポート従業員の存在も大きいだろう。ミズベは、障害のある従業員を支援する従業員46人全員が、障害者職業生活相談員、うち13人が企業に籍型ジョブコーチの資格を取得している。さらに、以前まで月2回の訪問だった精神保健福祉士には、いまは常駐の形で8拠点を巡回してもらっている。ミズベの管理部長荒井孝

WORKSHOP REPORT



「HELP CARD」のサンプル



管理部長の荒井孝昌さん

昌さんは「もともと精神保健福祉士の巡回は障害のある従業員のためでしたが、彼らをサポートする側からもさまざまな悩みが寄せられました。職場では先輩が経験をふまえて助言することも多いのですが、やはり専門職の方の話は説得力があるようです。各工場で定期的に勉強会やワークショップなども行い、好評です」と話す。

また、障害者の視点に立った新たな安全活動の一つとして、災害時などに自分の命と安全を守るための「HELP CARD」を2017年に導入した。首からさげる社員証ホルダーと一緒に入れる赤色のカードには、障害種別や支援してほしいこと、家族や支援機関・主治医の連絡先や服用薬の種類・量などを細かく記入できる。ミズベの従業員全員が携帯しているそうだ。「私自身も通勤時など何かあったときに、代わりにだれかが連絡してくれたら、助けてもらったりできるという安心感があります」と荒井さん。

さらに同年春には、障害のある従業員の就労定着支援に力を入れるため、管理部内に「サポートグループ」を新設。同年夏には「企画グループ」も誕生し、新しい業務の開拓に取り組む。近年、通勤圏内では精神障害のある求職者が圧倒的に多いこともあり、目下の重要課題は「精神障害のある方の採用をいかに拡大するか」だという。そのためのワーキンググルー

プを2月に立ち上げたばかりだ。障害者雇用の「時代の波」に立ち遅れないよう、荒井さんたちは各地で開催されるさまざまな障害者雇用向けセミナーや集まりに頻繁に参加し、情報収集にも余念がない。「私たちの理念や支援のあり方をしっかりと継承しつつ、時代に合わせて変えるべきものは変えていかなければいけない」と思っています。ミズベだけではなく親会社も巻き込んで、職域・雇用拡大のための議論も始めています。ミズベが、今後もグループ全体の障害者雇用を牽引していくという気概をもって取り組んでいきたいですね」

挑戦が日々の成長も うながす

毎年7月ごろに開催されるアビリンピック地方大会に向け、挑戦する選手を決めるのは年度初めの4月ごろからだ。各工場に声をかけ、職場の上司と相談して本人が立候補してくるそうだ。競技種目は業務内容と無関係でも構わず、本人の希望を尊重するという。上司らの指導やアドバイスを受けながら毎日のように行う練習は、就業時間内に確保している。練習に必要な道具なども社内の備品などをうまく使いまわしている。物心両面で手厚いバックアップ体制だが、最初のころは社内でも認知度が低かったらしく、当時参加していた従業員が「自分のとき

は1人でやっていた。いまは会社が応援してくれてうらやましい」と笑いながら教えてくれた。

周囲のサポートや応援を感じるほど、本人たちの「がんばりたい」という気持ちも強くなる。ある若い障害のある従業員は、同僚がアビリンピックの練習をする様子を見て「私も出られますか」と相談してきた。初めての地方大会は残念ながら結果に終わったが、泣きながら「再チャレンジします」と宣言したという。「泣くほど悔しい思いをする経験も、彼らの成長の糧になっているようで、こちらもうれしくなります」という荒井さんだが、同行した沖繩大会では「自分のほうが感動して泣いてばかりでした」と振り返る。最後に、アビリンピックに参加することの意味について、こう語ってくれた。

「もちろん賞をもらえることに越したことはないのですが、職場では、なによりも『みんな目標を持ってチャレンジすることを大事にしたいよね』と話しています。何かに挑戦する従業員のために、周囲のメンバーも仕事を助けたりアイデアを出しながら、一緒になって取り組んでいます。一人ひとりが刺激を受け、職場全体が活性化していくことを日々実感しています。それがミズベの理念の一つである『昨日より今日の自分が成長していることが僅かでも感じられること』にもつながっていると思います」